

#### 第4回「泉大津市オリアム随筆賞」

##### 【優秀賞】

青いセーター

末岡美奈子・東京都

「ずいぶん処分しちゃったんだねえ、がんばりすぎじゃない？」

父の様子を見に行った私は、あまりに変わった家の中の状態に驚きを隠せなかった。

「すごいだろ？今流行りの終活を、毎日こつこつ実行してるんだよ。」と父は少し自慢げに答えた。

認知症の症状が進んだ母が施設に入居したため、夫婦離れ離れの生活を余儀なくされてから一ヶ月もたたないうちに、今度は父の体に癌が見つかった。

検査入院から自宅に戻るやいなや、父は何かに取り憑かれたように、ひとり黙々と身辺整理をし始めた。

家具や食器などはすでに必要最小限の物しか残っておらず、何百冊もあった本やお気に入りのDVDも、きれいさっぱりと棚から消えていた。がらんとした室内は、例えようもない物悲しい雰囲気漂っていた。

「じゃ、何か私に出来る事はない？ そうだ、衣替えは？ そろそろ春夏物の準備して、冬物はクリーニングに出さないとね。」

私の質問に対して、父は小さく首を横にふった。「自分でできるから大丈夫。心配してくれてありがとう。薄い洋服は、ほらもうここに出してある。それに…、冬の服は…もういいらないだろう。」

予期せぬ父の返答に動揺した私は、返す言葉が見つからず、「何言ってるの？ 冬の服、まさか全部捨てちゃうつもり？ 寒くなつて慌てて服が無いつてなつても知らないから。」と言うのが精一杯だった。父は笑顔で一言、「そうだな。」とだけ呟いた。

片づけが一段落した所で、「桜でも見に行くか？」と父が言った。丁度満開を迎えていた桜並木を歩きながら、私は父の言葉を思い出していた。担当の医師から余命宣告されたわけでもないのに、自分自身の命尽きる時がわかるのだろうか？ 前を歩く父の後ろ姿がいつもより小さく見えた。

それから、三日に一度父の元を訪ねるといふ日々がしばらく続いた。ある日、こつそりと洋服だんすを開けてみると、ハンガーにかかっていたコートやジャケット、そして引き出しにあった厚手のセーターやズボン、冬用の下着類まですべてが無くなっていた。

「子どもたちには迷惑をかけたくない。」が口癖だった父は、邪魔にしかならない遺品を残すことに、強い罪悪感をいだいていたに違いない。

7月に入ると、父は突然体調を崩した。そして、三ヶ月後、静かに息を引き取った。父を失った悲しみは、想像していたよりも遥かに大きかった。町の至る所でクリスマスイルミネーションが輝く、華やかな季節になつても、私の心は重く沈んだままだった。

12月24日の朝、我が家に心当たりの全くない小包が届いた。荷物を受け取った夫は、「おーい、何か届いたよ。」と大きな声で私を呼んだ。「誰から？ クリーニング屋さん？」

訳がわからないまま封を開けると、見覚えのある青いセーターが現れた。「これ、私がお父さんにプレゼントしたセーターだ。」夫にそう伝えると、同封されていた手紙を手にとった。

手紙を読み終えた私は、ビニール袋を破いて、セーターを取り出した。そっと顔を近づけた時、涙がこぼれ落ちた。

長いつき合いのあったそのクリーニング店の店主と、父は生前一つの約束をしていた。手紙には、父が店主に告げた言葉が、丁寧に記されていた。

「自分は今病気ですが、がんばって次の冬にもう一度このセーターを着たいと思っています。でも、このセーターが必要となる頃になっても引き取りに来なかつたら、その時は娘に送ってもらえませんか？　これは、娘がイタリアで大奮発して買って来てくれた、本当に大切な宝物なんです。」

父はこのセーターを着ると、「いいなあ、やっぱりイタリアの青は違うねえ。これ着ると10才は若く見える。」といつも言っていた。

私は涙声を必死で抑えこみながら、店主にお礼の電話をかけた。父の遺品が何も無かつたから、最高のクリスマスプレゼントになった旨を伝え、受話器を置いた。

痩せ形の夫に、父のこのでっかいセーターが合わないことを承知の上で、私は夫に尋ねた。「ねえ、このセーター着てくれる？」

「それはどう考えても無理でしょ？　おまけにこのセーター、なんだかお義父さんのおいがするぞ。」夫の返事に、私は思わず吹き出した。父の死後、初めて私に笑顔が戻った瞬間だった。

父が亡くなって二回目の冬が、間もなくやって来る。クローゼットにかかった青いセーターに、「お父さん、今年は暖冬になるみたいだよ。」と声をかけると、静かに扉を閉めた。